よ。さあ、行つて御覽……あたし達の寢臺てよく寢てゐるよ……それは立派な樣子をして寢てゐるんだよ、片つぽの手を額の上へ載せて、憂ある王子と言つたやうな樣子で……

ペランジエエル。（急に泣き出す）姉樣、姉樣……姉樣

イグレエヌ。どうしたの。何を泣くの。

ペランジエエル。あたしの知つてる事を言ふ事は出來ないわ……それに、ほんとに知つてるんだかどうだか、それも分からないんですもの……でも、あたし聞いたのよ——人の聞けない事を……

イグレエヌ。どんな事を聞いたの。

ペランジエエル。あたし今日塔の廊下の側を通りかかると……

イグレエヌ。さあ。

ペランジエエル。戸が一つ明いてゐたのよ。それから、そつとそれを押して……中へ

はひつたの……

イグレエヌ。どんな所だつたい。

ペランジエエル。つひど見た事もない所なのよ……はひると燈のついた又外の廊下があるの。それから又、天井の低い廊下が果てしもなく續いてゐるの。それから先きへ進んではいけないんだといふ事が分かると……恐くなつて來て、引返さうとすると人の聲が聞こえるのよ……それが、聞こえるか聞こえない位の小さな聲なのよ……

イグレエヌ。それは女王の腰元達に違ひない。塔の下に住んでるんだからね。

ペランジエエル。何だつたかよくは分からなかつたわ……なんでも間の戸が二つも三つもあつたらしいのよ。その聲が咽喉を絞められてる人の聲のやうなのよ……あたし行けるだけ側へ行つて見たんだけれども……やつぱりなんにも分からないのよ。だけど、今日來た子供の話と金の冠の話をしてゐた事だけは確よ……そして、なんだか笑つてゐたやうよ……

イグレエヌ。笑つてゐたつて。

ベランジエエル。ええ、笑つてゐたやうに思つてよ……若し泣いてゐたんてなければ、それとも又、あたしに分からないやうな事をしてゐたんてなければ。だつて、よく聞こえないんてすもの、それは低い聲なのよ……丸天井の下に隨分人が集まつてゐるらしかつたわ……なんても、その子供を女王が見たがつてるなんて話をしてゐてよ……今夜あたりここへ來るかも知れないわ……

イグレエヌ。なんだつて……今夜來るつて。

ベランジエエル。ええ……ええ……さう思つてよ……

イグレエヌ。誰かの名前を言つてやしなかつたかい。

ベランジエエル。唯子供だつて言つてゐたわ——小さな、小さな子供だつて……

イグレエヌ。あの子の外に子供はゐない……

ベランジエエル。丁度その時、聲が少し高くなつて來たのよ、中の一人が、まだその

日にはならないつて言つたもんだから……

イグレエヌ。その意味は分かつてゐるよ。あの人達が塔から出たのは、それが始めてではないんだから……あたしはどうして女王があの子を呼び寄せたんだか、ようく知つてゐるよ……だけど、なんだつてそんなに急ぐんだらうねえ……なあに……あたし達は三人ゐるんだし、それにまだ時間もあるんだからねえ……

ベランジエエル。どうしようと言ふの。

イグレエヌ。どうするかまだ分からない、だけど、嚇かしてやらうと思ふの……どうするのか分かつてゐるかい。お前慄へてばかりゐるねえ……話して上げよう……

ベランジエエル。何を話すの。

イグレエヌ。唯はあの子を渡さない積りなんだよ……

ベランジエエル。でも加勢をして呉れる人がないぢやないの……

イグレエヌ。ああ、ほんとに加勢をして呉れる人がないねえ……もうたつた一つしかす

る事はないわ、あれならきつと大丈夫よ……いつかもしたやうに、跪いて待つてゐるの……女王はきつと憫みをかけて呉れるよ……涙には動かされる人だからね……女王の言ふ事はなんでも聞いて遣らうね。さうすれば、きつと笑ふよ。跪く者はみんな許すといふのが女王の爲來たりなんだからねえ……この長い年月、女王はあの大きな塔の中に住んでゐて、あたし達の可愛がつてゐる者をみんな喰べてしまつたんだよ。だけど誰もまだ女王の顔をぶつた者はないんだよ……女王はお墓の石のやうにあたし達の魂の上に乘つてゐるんだよ、だから誰も手を延ばす事が出來ないんだよ……ここに男が大勢ゐた時分、男でさへみんな恐れて、顔が上げられなかつた位だもの……今ではそれが女の番になつたんだよ……今に御覽……もうどうしても誰か立たなければならない時が來たんだから……女王の力が何處にあるか、それを知つてゐる者は誰もないんだよ、あたしはもうあの女の塔の影の中に住んではゐない積りだよ……行つておしまひ、二人ともそんなに慄へてばかりゐるんなら——あ

たし一人置いて行つておしまひ、二人とも……好いよ、あたしは一人で女王に會つてやるから……

ベランジエル。姉様、あたしどうしたら好いのか分からないけれど、姉様と一緒にゐるわ……

アグロワアル。姉様よ。わしも一緒にゐる……わしの魂は長い間落ち着かなかつた……やつて見るが好い……わしも幾度かやつて見たのだ……

イグレエヌ。あなたもやつて見たの……あなたも……

アグロワアル。わし計りではない、みんなやつて見たのだ……だが、いつも最後といふ時に、みんな力が盡きてしまふのだ……お前へもさうだらう、それはやがて分かる……わしは今夜にも女王に來いと呼ばれたら、兩方の手を束ねて、一言も物は言ふまい。さうして、わしの疲れた足は、ためらひもせず急ぎもせずに、階段を登るだらう、一度登つたら、二度と目を明いて降りては來られぬと知りながらも……わ

しにはもう女王に逆ふだけの勇氣がないのだ……わし等の手はもう役に立たぬ、もう誰に觸る事も出來ぬ……このやうな手てない手が入るのだ、だがもう何があつても役に立たぬ……併し、お前にはまだ望みといふものがあるから、わしはお前の加勢をするのだ……さ、戸を締めるのだ、タンタジイルを起すのだ。それから、お前の小さな手をはだけて、あの子をしつかり抱いて、膝の上へ載せるのだ……その外に防ぎやうはないのだ……

第三幕

同じ部屋。

イグレエヌとアグロワアル、舞臺にゐる。

イグレエヌ。あたし戸をみんな見て來てよ。みんなで三つあるのねえ。一番大きなのを番してゐませう……あとの二つは低くつて重いのよ。一度も明けた事のない戸なのよ。鍵ももう疾うに無くなつてゐるし、鐵の門が壁の中へ食ひ込んでしまつてゐるのよ。この戸を手傳つて締めて頂戴。この戸は町の木戸より重たいのねえ……それに、この戸は厚いのねえ、稻妻だつて通らない位なのよ……もうすつかり支度が出來て。

アグロワアル。（闕の上に坐りて）わしはこの闕の段の上に坐つて、劍を膝の上に載せてゐよう。わしがここにかうやつて張番をするのは、これが始めてではないのだ。だが、人には思ひ出す事が悉く分からぬ時があるものだ……わしは昔この通りの事を確にした事があるが、それがいつだつたか分からないのだ……だが、劍を拔いた事はまだ一度もない……わしの腕にはもう少しの力もないが、劍は今もわしの目の前にある。力はなくても、やつて見よう……なぜか分からぬが、自ら防ぐべき時が來たやうだ……

（ベランジエエル、タンタジイルを抱きかかへて、隣りの室より出て來る）

タンタジイルの死

ベランジエエル。起きてゐてよ……

イグレエヌ。大層青い顔をしてるねえ……どうしたんだらう。

ベランジエエル。分からないの……唯默つて泣いてゐたのよ……

イグレエヌ。タンタジイルや……

ベランジエエル。あら、あつちを向いてしまふわ。

イグレエヌ。あたしが分からないやうねえ……タンタジイルや、お前何處にゐるか分かるかい——お前にお話をしてるのは、お前の姉様だよ……何をそんなに見詰めてゐるの——こつちをお向き……さあ、姉様と一緒に遊ばうね……

タンタジイル。うゝん……うゝん……

イグレエヌ。遊ぶの厭かい。

タンタジイル。姉様、僕もう歩けないの……

イグレエヌ。歩けないつて……まあ、どうして——どこか痛いの……

タンタジイル。ええ……

イグレエヌ。何處なの——おつしやい、姉様が直して上げるから……

タンタジイル。何處だか言へないの……何處もかも痛いの……

イグレエヌ。姉様の所へお出で……姉様の腕の方が柔かいねえ、だから姉様に抱かれると、直ぐ直るよ……ベランジエエル、あたしの方へお寄越し……膝の上へ乘ると直ぐ直つてしまふんだから……そら、どうだい……お前の大きい姉様が二人ともこにゐるんだよ……お前の直ぐ側にゐるんだよ……みんなでお前の番をしてるから、なんにも恐い者は來やしないよ……

タンタジイル。來たよ。姉様……なぜ燈が附いてないの、姉様。

イグレエヌ。附いてるよ、坊や……天井に下つてゐる燈が見えないのかい。

タンタジイル。あれなら見えるよ……小ちやな燈だねえ……もう外に燈はないの。

イグレエヌ。もう外にあるものかね。あれてなんても見えるんだもの……

タンタジイル。ああ。

イグレエヌ。まあ。お前の目は大層窪んだねえ……

タンタジイル。姉様の目も窪んでゐるよ……

イグレエヌ。今朝はちつとも氣が附かなかつたよ……やつと今お前の目の中を見たんだよ……魂が見たと思ふものをあたし達はまるつきり知らないんだねえ……

タンタジイル。僕まだ魂を見た事ないよ。アグロワアルはなぜ闕の上にゐるの。

イグレエヌ。少し休んでゐるの……爺は寢る前にお前にキッスしたいんだつて……それで、お前の起きるのを待つてゐたんだよ……

タンタジイル。爺の膝の上にあるのは何だい。

イグレエヌ。膝の上に。膝の上には何もありやしないよ。

タンタジイル。ううん、ううん、何だかあるよ……

アグロワアル。なんでもないのだ……わしはわしの古い劍を眺めてゐるのだ。それも

もうわしには好く分からないのだ……長の年月わしに仕へた劍だが、わしはもう疾うからこの劍に信用は置いてをらぬ。もう直き折れるだらうとさへ思つてゐるのだ……丁度劍の柄の所に、小さな傷がある……わしは刃の曇つて來るのに氣がついて、自分で自分に尋ねた事がある……何を尋ねたか、それはもう忘れてしまつた……わしの魂は今日はひどく重い……どうしたら好いのだ……人は待ち設けぬものを待ちながら、生きてゐなければならぬ……さて、それから自分の思ふ通りに働かなければならぬ……時には用なき命の苦い味を嘗めて、目をつぶりたくなる悲しい晩もある……もう夜中だ、わしは疲れた……

タンタジイル。姉様、爺には傷があるね。

イグレエヌ。何處に。

タンタジイル。額にも、手にも。

アグロワアル。これはもう古い古い傷だ、もう少しも痛みはせぬ……今夜はきつと

燈が傷の上に差すのだ……これまで氣がつかなかつたかな。

タンタジイル。姉様、爺は悲しい顔をしてゐるねえ……

イグレエヌ。いいえ、いいえ、悲しい顔なんどしちやゐないよ、ただ疲れてゐるだけだよ……

タンタジイル。姉様、姉様も悲しい顔をしてるねえ……

イグレエヌ。どうして、どうして。御覽、あたしは笑つてゐるよ。

タンタジイル。も一人の姉様も悲しい顔をしてるねえ……

イグレエヌ。いいえ、あの人だつて笑つてゐるよ……

タンタジイル。ううん、あれは笑つてるんぢやないよ……僕ちやんと知つてるよ……

イグレエヌ。さあ、あたしにキッスをおし、そしてもう外の事をお考へ……

（イグレエヌ、タンタジイルに接吻す）

タンタジイル。何を考へたら好いの——姉様のキッスはなぜさう痛いの。

イグレエヌ。痛かつたかい。

タンタジイル。ああ……どうして僕には姉様の動悸が聞こえるんだらう……

イグレエヌ。あたしの動悸が聞こえるかい。

タンタジイル。そら、そら、聞こえるよ、丁度……

イグレエヌ。丁度なに。

タンタジイル。なんだか分からない。

イグレエヌ。もうさう何でもない事を氣にしては厭よ、もう謎のやうなお話はしつこなしよ……まあ、涙を一ぱい溜めてゐるぢやないの……何がそんなに悲しいの。おや、今度はお前の動悸が聞こえるよ……人を抱くと、きつと動悸が聞こえるものだよ。心が舌の知らない事を話したり言つたりするのも、さういふ時だよ……

タンタジイル。今まで僕にはなんにも聞こえなかつたんだよ……

イグレエヌ。それは、その時分はね……まあ、お前の動悸は……どうしたんだい……

まあ、今にも破れさうだよ……

タンタジイル。（泣き叫ぶ）姉様、姉様。

イグレエヌ。どうしたの。

タンタジイル。ああ聞こえる……あの人達が……あの人達が來るよ。

イグレエヌ。誰がさ。誰が來るのだよ……どうしたの……

タンタジイル。戸を。戸を。もうそこへ來た……

（イグレエヌの膝の上へ、のけざまに倒る）

イグレエヌ。どうして……まあ、この子は……目を廻してしまつたよ……

ベランジエエル。氣をおつけよ……氣をおつけよ……倒れてしまふと大變だから……

アグロワアル。（猛然、劍を手にして立ち上がる）わしにも聞こえる……廊下に足音がする。

イグレエヌ。おう……

（一瞬間の沈默——一同耳を欹つ）

アグロワアル。さうだ、確に聞こえる……大分大勢だ……

イグレエヌ。大勢だつて……何が大勢なの。

アグロワアル。それは分からぬ……聞こえるかと思ふと、聞こえなくなるのだ……あいつ等は他の者と動き方が違ふ、だが、それでも遣つては來るのだ……それ、もう戸に觸つてをる……

イグレエヌ。（兩手にタンタジイルを激しく抱いて）タンタジイルや……タンタジイルや……

ベランジエエル。（一緒に弟を抱きしめて）あたしにも抱かして。あたしにも……タンタジイルや……

アグロワアル。戸を搖ぶつてゐるな……それ……靜に……何か囁いてゐるぞ……

（鍵を錠に突き入れて、激しく廻す音す）

イグレエヌ。あ、鍵を持つてゐる。

タンタジイルの死

アグロワアル。さうだ……さうだ……確にさうだと思つた……お待ち。（劍を高く上げて、最も上なる段に突つ立ち、二人の姉に）おいて……お前達もおいて……

（一瞬間の沈默。戸少し開く。羅針盤の針の如く慄へつつ、アグロワアル、戸の隙間より、劍の先を戸の柱の間に突き入る。劍は折戸の怪しき壓迫に烈しき音をなして折れ、刄の折は響きをなして階段を轉び落つ。イグレエヌは尙氣を失ひたるタンタジイルを抱きたる儘躍り上り、ベランジエエル、アグロワアルと力の限りを併せて戸を押し戻さむとすれども叶はず、戸は益々靜に開き來る、しかも何者の見えず、何者の聞こえざるなり。唯眼なる冷たき光、部屋の内に差し來るのみ。この時タンタジイル、俄に手足を延ばして、息吹き返し、蘇生の一聲高く叫びて、姉に縋りつく——その途端に、戸は一たまりもなく押されて、忽ち元の位置へ歸る）

イグレエヌ。タンタジイルや。

（皆々驚きて、顏を見合はす）

アグロワアル。（戸の側に立ちて、耳を欹て）もう何も聞こえぬ……

イグレエヌ。（狂喜して）タンタジイルや。タンタジイルや……御覽。御覽……坊やは

助かつたよ……坊やの目を御覽……青いのが見えるだらう……おや、何か言ひさうにしてゐるよ……あいつ等はあたし達が番をしてるのを見たんだよ……だから、どうする事も出來なかつたんだよ……キッスしてね……好いかい、キッスしてね……キッスしてね……みんなを。みんなを……魂の底の底まで……

（四人、涙を滋へて、互の腕に縋る）

第四幕

前幕の部屋の前なる廊下。

女王の侍女三人登場。いづれも面を包み、長き黑衣の裾を引く。

第一の侍女。（戸の方へ耳を寄せて）もう番はしてゐないやうですよ……

第二の侍女。猶豫をする事はなかつたのねえ……

第三の侍女。でも、靜に遣る方が、御意に召すのですから……

第一の侍女。もう確にみんな寢てゐますよ……

第二の侍女。早く……戸をお明けなさい……

第三の侍女。もう丁度好い時分です……

第一の侍女。そこに待つて入らつしやい……わたし一人ではひつて見ますから、三人行く程の事はありません……

第二の侍女。さうですとも。あんなに小さな子に……

第三の侍女。でも、大きい方の姉には氣をつけないといけませんよ……

第二の侍女。姉達に知れぬやうにと女王樣がおつしやつたのを覺えて入らして……

第一の侍女。大丈夫ですよ。わたしの足音が滅多に聞こえるものですか……

第二の侍女。ぢやあ、おいでなさい。もう好い時分です。

（第一の侍女、そつと戸を押して、部屋の中へはひる）

もう夜中ですね……

第三の侍女。ああ……

（一瞬間の沈默。第一の侍女、部屋より出て來る）

第二の侍女。あの子は何處にゐまして。

第一の侍女。二人の姉の間にはひつて寢てゐますの。兩手で二人の姉の首を抱へてゐますの、姉達は又しつかりあの子を抱いてゐますの……迚も一人では駄目ですわ……

第二の侍女。では、あたしが手傳ひませう……

第三の侍女。それが好い。二人で一緒に行つて入らつしやい……あたしはここで番をしてゐますから……

第一の侍女。氣をつけて行かないと、悟られますよ……三人とも厭な夢を見て、魘されてゐるやうでしたから。

（二人の侍女、部室へはひる）

第三の侍女。人はいつでも直ぐ悟るのねえ。でも、悟つた事が何だか、それは分からないのだわ……

（一瞬間の沈默、第一、第二の侍女、又部屋より出て來る）

第三の侍女。どうして。

第二の侍女。あなたも來なければ駄目ですわ……迚も二人では放す事が出來ないんですよ……

第一の侍女。やつと二人の姉の腕を解いたかと思ふと、直ぐ又それが子供を抱いてしまふのですよ……

第二の侍女。そして、子供は段々段々二人に搦みついて來るのですよ……

第一の侍女。子供は額を大きい方の姉の胸の上に載せて寢てゐるのですよ……

第二の侍女。そして、頭が姉の胸の上で高くなつたり低くなつたりしてゐますの……

第一の侍女。子供の手を開く事がどうしても出來ないんですの……

第二の侍女。二人の姉の髪の毛の中へ、すつかり突つ込んでゐるんですもの……

第一の侍女。子供は小さな齒の間に金色の毛を銜へてゐるのですよ……

第二の侍女。大きい方の姉の毛を切らなければいけません……

第一の侍女。もう一人の姉のも切らなければ駄目ですわ……

第二の侍女。鋏を持つてゐますか……

第三の侍女。ええ……

第一の侍女。早く入らつしやい。みんな動き出したやうですから……

第二の侍女。目蓋が胸と一緒に波を打つてゐるんですよ……

第一の侍女。さうですよ。あたしは大きい娘の青い目の光をちらつと見ましたわ……

第二の侍女。あの娘はあたし共の方へ目を向けましたけれど、あたし共を見はしませんでしたよ……

第一の侍女。三人の内の一人に觸ると、きつと他の二人が慄へるんですよ……

第二の侍女。いくら跪いたつて、動けやしないんですの……

第一の侍女。大きい方の姉は聲を立てようとするんですけれど、聲が立てられませんの……

第二の侍女。さあ、早くいらつしやい。氣が附いたやうですから……

第二の侍女。老人はゐませんの。

第一の侍女。いいえ、ゐるんです、隅の所に、一人離れて寢てゐるんですの……

第二の侍女。額を劍の頭に載せて、寢てゐるんですよ……

第一の侍女。老人はなんにも知らないんですよ。なんにも夢を見てゐないんですよ……

第二の侍女。さあ、さあ、急いで遣つてしまひませう……

第一の侍女。手や足を解くのが、中々大變なんですよ……

第二の侍女。水に溺れる人のやうに、搦み合つてゐるんですもの……

第三の侍女。さ、參りませう、參りませう……

（三人はひろ、眠りに息を詰められし溜息と苦痛の低き呻きに寂寞破る。やがて、三人の侍女、暗き部屋より急ぎ駈け出づ。侍女の一人、熟睡せるタンタジイルを抱く。眠りの内に痙攣する小さき手よりも、苦痛に食ひしばる口よりも二人の姉の頭より零はれし金髪、長く地の上に流れ漂ふ。侍女等、急ぎ去る。完全なる沈默。侍女等廊下の末端に至れりと覺ゆる頃、タンタジイル、目覺めて、激しき苦痛の叫びを上ぐ）

タンタヂイル。（廊下の末端より）あああ……

（新しき沈默。隣りの部屋より、二人の姉の目覺めて、立ち騷ぐ物音聞こゆ）

イグレエヌ。（部屋の内にて）タンタジイルや……何處へ行つたんだい……

ベランジエエル。ここにはゐなくてよ……

イグレエヌ。（悲痛の高まり來る調子にて）タンタジイルや……燈、燈……燈をつけて……

ベランジエエル。ええ……ええ……

（イグレエヌ、燈火を手にして部屋を出づる樣、開きゐる戸口より見ゆ）

タンタジイルの死

イグレエヌ。まあ、戸が明いてゐる。

タンタジイルの聲。（殆ど聞こえねばかり遠くにて）姉様ああ。

イグレエヌ。あ、呼んでゐる……呼んでゐる……タンタジイルや……タンタジイルや……

（廊下へ駆け入る。ベランジエエル、後より續かむとして、閾の上に氣を失ひ倒る）

第五幕

薄暗き丸天井の下なる大いなる鐵の扉の前。

忽ち面窶れせしイグレエヌ、燈火を手にし、髪振り亂して登場。

イグレエヌ。（激して前後を見廻しつつ）誰も附いて來ない……ベランジエエル……ベランジエエル……アグロワアル……何處へみんな行つたんだらう——みんな坊やを可愛がつてゐるなんて言つてゐながら、あたし一人ぼつちにしてしまつたんだよ……タ

ンタジイルや……タンタジイルや……おう、さうだ……あたしは數限りもない段々を登つて來たのだ、大きな冷たい壁の間を通つて……あたしの心の臓はもうあたしを生かしては置かないのだ……あ、この天井は動いてゐるやうだ……（柱にどうと寄り掛る）あ、倒れさうだ……おう。おう。あたしの哀れな命。それがあたしには好く分かる……それはあたしの唇の上に慄へてゐる——今にもあたしを離れようとしてゐる……あたしは何をしたんだらう……なんにも見なかつた、なんにも聞かなかつた……おう、この靜なこと……どこの段々にも、どこの壁にも、金の毛が落ちてゐた、あたしはその毛を傳つて來たのだ。あたしはその毛を拾つて見た……ほんとに綺麗だ……坊や……坊や……あたしは何を言つたんだらう。分かつた……あたしはそれを信じてはゐないんだ……寢てゐると……充らない事や出來ない事がみんな……あたしは何を考へてゐるんだらう……もう分からない……目が覺める。それから……底の底まで考へなけりやならない……或人は或事を言ふ、又他の人は他の事を言ふ。て

も魂は丸で違つた道を行くんだ。鎖は解けても、分からない事は澤山ある……あたしはあたしの小さい燈を持つてここへ來た……階子段の風にも、燈は消えなかつた……それに就いてどう考へたら好いんだらう……世の中には、まだ分からない事が澤山ある……それを知つてる人も澤山あるに違ひないのだけれど、なぜその人達は話して呉れないんだらう（あたりを見廻す）こんな所は一度も見た事がない……中々こんな高いとこまで上がつて來る事は出來ない——もう何をしてもいけないんだわ……おう、寒い……眞暗で息をするのが恐ろしい……この暗い影の中には毒があるといふ話だわ……恐ろしい戸だこと……（戸に近づきて、戸に手を觸れる）おう、冷たい……鐵の戸だ……鐵の一枚戸だ——どこにも錠の穴がない……どうして明けるんだらう……蝶鉸も見えない……壁の中へでも喰ひ込んでるのだらうか……もうここから先へは行けないんだ……もう先には段々がない……（不意に恐ろしき聲を立てる）や、又金の毛がある、戸の隙に挾まつて……タンタジイルや……タンタジイルや……さう、

さう、たつた今戸の締まる音がしたんだつけ……分かつた。分かつた……さうに違ひない。（手足もて、物狂ほしく戸を叩く）鬼め。鬼め……たうとう見つけたぞ……畜生。畜生。

（戸の内側より、力弱く叩く音聞こゆ。やがてタンタジイルの聲、いとか弱く、鐵の肯板を通して聞こゆ）

タンタジイル。姉様、姉様……

イグレエヌ。まあ、タンタジイルや……何だい……何だい……タンタジイルや、お前かい……

タンタジイル。早く明けて、早く明けて……あの人がそこにゐるから……

イグレエヌ。おう。おう……誰がゐるの……タンタジイルや、あたしの小さいタンタジイルや……姉様の聲が聞こえるかい……何なの……どうしたの……タンタジイルや……お前をどうかしたのかい……何處にゐるの……そこにゐるのかい……

タンタジイル。姉様、姉様……明けて頂戴——明けて呉れないと、僕死んでしまふんだ

よ……

イグレエヌ。やつて見よう——お待ち、お待ち……明けてやるから、明けてやるから……

タンタジイル。分からないんだねえ……姉様ぐず〳〵しちやゐられないんだよ……僕どうしたつて捕まりやしないから……そら、僕ぶつて遣つたよ、ぶつて遣つたよ……そら、僕逃げたよ……早く、早く、そら、もうそこへ來た……

イグレエヌ。今行くよ、今行くよ……あいつは何處にゐるんだい。

タンタジイル。見えやしないの……聞こえるだけなの……ああ、恐い、姉様、恐いよ……早く早く……早く明けて……五生一生のお願だから、姉様……

イグレエヌ。（氣遣はしげに、戸を探りつつ）きつと見つけるから……少しお待ち……一分……一秒……

タンタジイル。駄目だよ、姉様……もうあの人の息が掛かつて來たもの……

イグレエヌ。そんな事何でもないよ、タンタジイルや。あたしの可愛いタンタジイルやなんにも恐い事はないよ……ああ、一目見られさへすれば……

タンタジイル。見えるよ、見えるよ——ここから姉様の燈が見えるもの……姉様のゐる所は明かるいねえ……こつちはなんにも見えないよ……

イグレエヌ。あたしが見えるつて。何處から見えるんだい。何處にも穴はないぢやないか……

タンタジイル。あるんだよ、あるんだよ、ここにあるんだよ。だけど小ちやいんだよ……

イグレエヌ。何處にさ。ここかい……教へてお呉れ、教へてお呉れ……ぢやあ、あすこだね。

タンタジイル。ここだよ、ここだよ……分かるかい……僕の叩いてゐる所だよ……

イグレエヌ。ここかい。

タンタジイルの死

タンタジイル。もつと上……それは小ちやいんだよ……針も通らない位なんだよ……

イグレエス。心配おしてないよ。あたしがここにゐるんだから……

タンタジイル。ああ、分かつたよ、姉様……戸を引つ張つてお呉れ、引つ張つて、引つ張つて、あ　人が來たからさ……少しても……ほんの少しても明けば……僕小ちやいんだから。

イグレエヌ。あたしの爪はみんなこぼれてしまつたんだよ……押しても見たんだよ、力の有りつたけ打つても見たんだよ……力の有りつたけ。（再び拳を振つて不動の扉を動かさむとす）指が二本痺れてしまつたよ……泣くんぢやないよ……鐵で出來てるんだからね……

タンタジイル。（絶望して咽び泣く）姉様、なんにも明ける物を持つてゐないの……なんにも、なんにも……僕出られるのになあ……こんなに小ちやいんだもの、本當に小ちやいんだもの……姉様知つてるのねえ……

大正十年十一月二十日印刷
大正十年十一月廿五日發行

近代劇五曲
定價金參圓

著作者　小山内薫
東京市神田區表神保町十番地

發行者　福岡益雄
東京市神田區淡土代町二丁目一番地

印刷者　横山喜助
東京市神田區淡土代町二丁目一番地

印刷所　活文舍

發行所　東京市神田區表神保町十　金星堂
電話神田（三八五三番 四八三一番）
振替東京三三一八番

329
165

終